

【雛祭り】ひなまつり

一月七日の人日[ジンジツ]、三月三日の上巳[ジョウシ]、五月五日の端午[タンゴ]、七月七日の七夕[セキユウ]、九月九日の重陽[チョウヨウ]を五節句といいます。

いずれも陽の数(奇数)の重なる日で季節の節目を意味します。

このうち上巳の節句は陰暦三月の初めの巳の日でしたが魏以降は三月三日に定着したようです。

『後漢書』礼儀志に「是の月上巳、官民皆東流水上に契す。洗濯祓除と曰ふ」とあり、水辺で邪気を祓う行事が行われたものと思われます。

またこの日、曲水之宴も行ったようで日本でもこれに習い『日本書紀』顕宗天皇元年(485)三月上巳に曲水宴をした記載があります。

平安時代には上巳祓[ジョウシノハラエ]として、この日人形に息を吹きかけたり、撫でて穢れを移し、陰陽師に祓わせ川や海に流す行事を行いました。

『源氏物語』須磨にその様が見られます。

「今日なむ、かくおぼすことある人はみそぎし給ふべき(中略)陰陽師召して、祓へさせ給ふ、舟ことごとしき人形のせて流すを見給ふに…」

光源氏が祓の様を眺め、流される人形の運命に自分の姿を重ね合わせるという場面です。

このような魔除・形代としての人形はすでに万葉の時代に天児[アマガツ]・這子[ハウコ]とよばれるものがありました。古くは草製・木製でしたが平安時代には紙製の人形が現れます。紙は高価でしたので階層により材質は異なったのでしょう。

特に子供の護符としての性格が強かったのは、幼児の死亡率が高かった証でしょう。

上巳祓とは別に、古来日本で行われた子供の遊びに「雛あそび」があります。

現代のままごと遊び・人形遊びと同様に雛と呼ばれた人形・小さな調度品・衣類を用い家庭生活を模した童女の遊びだったようです。この遊びは時期を選ばず、人形を流したわけでもなくお祓いの意味など全くありません。

この雛あそびが上巳祓に影響を及ぼした様子が当時の日記などに見うけられます。

祓いに用いた形代は平安時代に雛あそびに用いた紙製の立ち雛を模し、上巳祓と雛あそびは習合していきます。既に江戸時代には年中行事化し、元禄の頃には豪華な座り雛が造られ今日の雛祭りに至るのです。この頃になると人形は流されるどころか母から娘に代々受け継がれるようになりました。

今では祓いの意味は忘れられ、端午の男の子の節句に対し、女の子の節句として親しまれています。

しかし、地方によっては「流し雛」として今でも人形を川へ流す行事が残っているそうです。どなたか体験したことがおありならお話をお寄せください。

節句にはその季節を表す景物がつきものですが、端午が菖蒲・重陽が菊であるのに対し上巳は桃、すなわち桃の節句といわれていることはご存知のとおりです。

雛祭りを詠んだ俳句には秀句が多いようです。【雛＝ヒイナ・ヒナ】

- | | |
|--------------------|-------|
| ・花咲かぬ片山陰も雛祭 | 小林一茶 |
| ・もたれ合ひて倒れずにある雛かな | 高浜虚子 |
| ・雛の唇[クチ]紅ぬるるまま幾世経し | 山口青邨 |
| ・仕る手に笛もなし古雛 | 松本たかし |
| ・春のほか知らぬ雛をかざりけり | 鶴田玲子 |

これらいずれの秀句にも人形の哀れが漂っているように思うのは私の勝手な感傷に過ぎないでしょうか。

この中の鶴田玲子は一般にあまり知られていない俳人かも知れません。しかし流石は女性、小さな雛人形の哀れを一際しっかり捉えているように思います。

春の喜びとはうらはらに、穢れを負い流された人形の哀れが現代の句にまで残映しているかのよう思えてなりません。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

～ Copyright (C) 2011 ～私の書齋～ 森田文康. All Rights Reserved.～